「社会知性」を体現する校友たち

わ れ ら 専 修 人

File No. 173

東芝ブレイブルーパス東京 所属
ラグビー選手
髙橋昴平さん
（平31・経営）

たかはしこうへい●長崎県出身、1996年生まれ。在学中はラグビー部に所属し、4年時にはキャプテンを務めた。1部2部のリーグ入れ替え戦では、チームを1部残留に導く。卒業後の2019年、ジャパンラグビートップリーグの東芝ブレイブルーパス（現・LEAGUE ONEの東芝ブレイブルーパス東京）に加入。スクラムハーフのポジションで、アグレッシブなプレーを持ち味に高みを目指す。

写真提供/東芝ブレイブルーパス東京

JAPAN RUGBY LEAGUE ONEのDIVISION 1、つまり、社会人ラグビーにおける日本トップのリーグに属する「東芝ブレイブルーパス東京」は、かつて“東芝府中”の名前で知られた名門チームである。実は、専修大学ラグビー部との縁も深く、卒業後に加入した選手が多く存在する。なかでも村田亙さん（平2・人文、平成24年～令和5年・専修大学ラグビー部監督）と伊藤護さん（平10・経済）の2名は、スクラムハーフ↗のポジションで才能を開花させ、日本代表としても活躍した。ともすれば、同じく専修大学出身でスクラムハーフを務め、東芝ブレイブルーパス東京へ加入した髙橋昴平さんに、特別な期待を抱かずにはいられない。

髙橋さんとラグビーとの出会いは、4～5歳の頃。5つ年上の兄が通う地元のラグビークラブについて行ったのが、きっかけだった。当初は、ラグビーのルールを複雑に感じながらも、ボールを蹴り、パスして、ときには体当たりで相手を跳ね飛ばす。そんな一連の動きに心を惹かれて、自身も始めたという。

「中学生までは野球やサッカーなども経験しましたが、没頭するほど好きになったのはラグビーだけですね」

そうして夢中になって続けていた髙橋さんは、中学時代からスクラムハーフとして頭角を現し、県選抜チームの一員となる。所属するクラブチームでも全国大会を経験し、高校は長崎で四強といわ↙

“好き”という原動力で、壁にまっすぐ挑み続ける

専修大学在学中にはラグビー部キャプテンを務め、
ケガに苦しみながらも、チームの1部リーグ残留に貢献した髙橋昴平さん。
卒業後は名門チームへ加入し、全国トップクラスの選手とともに切磋琢磨している。
そんな彼はどのようにラグビーと出会い、プロへの道筋を辿ったのか……。

れる長崎南山高等学校に特待生として進学した。1～2年生のときには花園（全国大会）でプレーしたものの、3年時には県大会で敗れてしまう。

「卒業後は福岡の大学へ進学しようと考えていたとき、当時、専大ラグビー部の監督を務めていた村田さんに初めてお会いしたんです。春の九州大会で、声をかけていただきました。その日の試合は負けてしまったんですが、アドバイスをもらって、『よかったよ。専大にきてほしい』と誘ってくださったことが、とてもうれしかったですね」

当時の髙橋さんには、「高校最後の年に、全国大会へ進めなかった」という不完全燃焼な気持ちがあった。加えて「将来はトップリーグでプレーしたい」という想いを漠然と抱いており、専大への進学はリーグチームが多い関東進出へのチャンスと感じられたという。また、自身がラグビーを始めるきっかけとなった兄も、専大ラグビー部でプレーしていたことから、同じ大学に進む決意をしたそうだ。

スピードとパワーで攻める「9番目のフォワード」

髙橋さんが中学時代から務めるスクラムハーフの役割は、フォワード（前衛）とバックス（後衛）をつなぐ“パスのスペシャリスト”である。フォワードが組むスクラムから掻き出されたボールを最初に拾い、バックス陣へとパスを回す。俊敏さと試合を走り切る無尽蔵なタフネスが求められ、かつクレバーな判断能力も必要とされる司令塔だ。

「身長はそんなに高くありませんが、体の強さに自信を持っています。同じポジションの人に、体力で負けないということが強みです」

スクラムハーフのプレースタイルは、選手によって異なるという。例えば、同じポジションで活躍していた村田さんについては、「天才肌のスクラムハーフ」だと、髙橋さんは専大時代の練習を振り返りながら語る。

「村田さんは、1から10まで全部は教えないという監督でした。選手の意見を聞いて、足りない部分にアドバイスをしながら、自分で考えさせるんです。練習にがっつり参加するタイプで、グラウンドで現役の学生に混じって、実戦に近いスピードで闘志をむき出しにしてくれて、本当に楽しかった。僕は村田さんの動きを見て盗もうとしましたが、真似できないこともたくさんありましたね」

ほかにも、ヨガやレスリングなどの要素を取り入れるなど、メリハリのある練

スピードと強靭な体躯を持ち味にゲームをコントールする　写真提供/東芝ブレイブルーパス東京

習スタイルも特徴的だった。また、自主性を尊重し、選手に考えさせる監督と、緻密な練習プランを組み立てるコーチ陣が両輪となっており、バランスよくチームを育成していったという。それらがうまく機能したことで、髙橋さんの入学時、専大ラグビー部は2部リーグから1部リーグに昇格していた。

ところが、入学後の1年時には2部リーグへ落ちてしまい、そのまま２年生を終えることとなる。

３年になって、ようやく髙橋さんが主力メンバーとして試合に出られるようになると、「ボールを持ったら強いスクラムハーフ」と評価されるようになった。「９番目のフォワード」と呼ばれ、スピードとパワーを兼ね備えたスクラムハーフとしてチームに貢献し、1部リーグへと返り咲く。

新キャプテンを襲う、予期せぬアクシデント

そして迎えた4年時、チームは「常にチャレンジャー」という気概に満ちていた。村田監督と髙橋新キャプテンという体制のもとで、全員が考えて意見を交わす、よい雰囲気の新チームだ。外部からも1部リーグでどこまで勝ち上がれるかと、さらなる飛躍が期待された年だったが、予期せぬアクシデントが髙橋さんを襲う。

「4年生となり、キャプテンに任命された4月にケガをしてしまいました。練習中にステップを切ったとき、前十字靭帯を断裂したんです。テーピングで、がちがちに固めてシーズンを乗り切るという選択肢もありましたが、いずれは絶対に手術をしなくてはならない症状でした。悩んだ末に手術を決意しましたが、リハビリをどう頑張っても、シーズン全日程のラスト3試合しか出られない状況だったんです」

前十字靭帯断裂を手術した場合、通常は8〜9カ月、長ければ10カ月の回復期間を必要とする。髙橋さんは副キャプテンに「チームをお願いします。必ず戻ってくるから」と頭を下げ、6カ月半先に予定されていた最後の3試合での復帰に向けて、懸命のリハビリに取り組む。

「自分はキャプテンの立場でありながらケガをしてしまい、チームに対して申し訳ない気持ちでいっぱいでした。でも、クサる姿だけは見せたくない、あきらめたくない。そう心から思っていました。自分自身はリハビリ中心で、裏方や精神面でのサポートしかできないので、想いは言葉で伝えるしかありません。『去年せっかく1部へ戻ったのに、この世代で2部に落ちたくはない。絶対、残留しよう』と。前の世代が4年生中心のチームだったので、新編成のメンバー全員が死に物狂いで、一丸となって試合に挑みました」

実は、ケガの1週間ほど前、髙橋さんは村田監督の紹介で、東芝ブレイブルーパス（現・東芝ブレイブルーパス東京）の練習に参加している。そこで、当時、同チームのキャプテンだった廣瀬俊朗さんに、キャプテンシー※について自身の考えを聞いてもらい、「お前のやり方でいいと思うよ」と背中を押してもらったそうだ。その後に行われた採用担当者との食事会では、「チームとしては、来てほしいと思っています」と願ってもない打診を受けた。練習内容や廣瀬さんの人柄から、東芝ブレイブルーパスに魅力を感じており、何よりトップリーグでプレーしたいという夢に手が届いた瞬間である。「お願いします」と、ありがたく申し出を受け入れた。

その矢先のケガだけに、文字通り、目の前が真っ暗になったという。東芝ブレイブルーパスの採用担当者には「すいません、ケガしちゃいました。手術して絶対に戻ってきます」と、半ば自分に言い聞かせるように、努めて明るく伝えるほかなかった。採用担当者は「無理しないで頑張れよ」と言ってくれたが、予後が思わしくなければ、専大ラグビー部の１部リーグ残留も、自らの夢に抱いていた将来への道も、断たれてしまう。

スクラムハーフながら「９番目のフォワード」と評される頼もしい存在

学生時代のほとんどの時間を共に過ごしたラグビー部のメンバー

※キャプテンとしてチームを統率する力

プロとなってからも成長し続けることを自らに課している

東芝ブレイブルーパス東京の練習風景。14番のピブスが髙橋さん

そんな状況で、焦りもあったはずだ。しかし髙橋さんは、堅実に、前を向いていた。最初は足が動かせない状態で、上半身のウェイトトレーニングを中心に、筋力維持に励む。少しずつ歩けるようになると、すっかり落ちた足の筋力を取り戻すため懸命に歩き、走った。もちろん体は思うように動かず、心肺への負担もきつかったが、やり続けたという。

「自分がリハビリをさぼっていては、チーム全体の士気を下げてしまうと思いましたし、何より申し訳ない。一刻も早く復帰したい気持ちで、みんなが練習しているグラウンドの端を使って、黙々とトレーニングに取り組みました」

シーズンの大半をリハビリに費やして迎えた12月、驚異的な回復力で復帰した髙橋さんがスタメン出場したのは、1部リーグ残留を賭けた、東洋大学との一戦だった。専修大学は激しいタックルとスピードを伴ったアタックで相手をねじ伏せ、勝利をもぎ取る。ラグビー部としての大学生活４年間、そして春からの努力が報われた瞬間だった。

「僕の学生時代はラグビーだけでした。ゼミにも参加できず、朝練が終わったら伊勢原の練習場から生田キャンパスまで1時間30分。朝練後、一限の授業は本当にきつかったですね。1〜2年時は掃除や洗濯の役割もあって、大変でした。ただ、そんな中でも楽しいこともあって、ラグビー部の伝統で12月23、24、25日にクリスマスケーキの工場で夜勤のバイトをするんです。何日間入るかは自由なんですけど、年末年始のお小遣いをそこで稼ぐのがしきたりで、兄もやっていたのを覚えています。仲間同士で夜通しケーキをつくるなんて、学生時代にしかできない楽しい思い出です。専修大学で4年間を過ごさなければ、今の自分はありません」

現状に満足はしない。さらなる高みを目指して

専大ラグビー部の1部リーグ残留という責務を果たし、大学卒業後の2019年春、髙橋さんは、晴れて東芝ブレイブルーパスに加入。恩師である村田さんの出身チームであり、国内外のトッププレーヤーたちが集う、国内最高峰を競う夢の場所だ。髙橋さんは今年、5年目のシーズンを迎える。

「学生時代にもリーグ降格やケガなど、多くの乗り越えるべき困難がありましたが、プロになってからも次々と壁が立ちはだかりました。1年目は出場機会にあまり恵まれず、2年目はコロナ禍で試合はもちろん、練習もできない。人と接することが許されず、誰とも会わないよう、寮に監禁されているような状況です。ラグビーがやりたい！　という想いは、日に日に強くなっていきました」

コロナ禍はアスリートにとって、まさに窮地であった。それでも感染対策をしながら、寮の中庭といった限られたスペースで仲間たちと軽く草野球に興じるなど、息抜きを行いながら、体を動かすよう努めたという。

コロナ禍がやや落ち着いた翌2021年、3年目を迎えた髙橋さんは全試合出場を果たすという躍進を遂げた。その年にジャパンラグビートップリーグは18年間続いた幕を閉じ、翌年からJAPAN RUGBY LEAGUE ONEへと移行する。当然、髙橋さんはそこでも大いに活躍を期待された。しかし、またも大きな壁に阻まれることとなる。

「これからだ、というときに、以前とは逆の足をケガしてしまいました。現在は治りましたが、ラグビーはプレー中の接触も多く、ケガと隣り合わせのスポーツです。プレーヤーはどんなに調子がよくても、ケガをしたら終わりですから、気分が落ち込んだり、後ろ向きの考えを持ったりしてしまいます。しかし、東芝ブレイブルーパス東京にいる人たちは、そうした逆境をも乗り越える精神力を持っている。僕自身も『絶対乗り越えて、また強くなる。まだ強くなる』と強い気持ちで、乗り越えてきたところがあります」

折れない心で、どのような困難にも立ち向かう。髙橋さんのメンタルは、他のチームメンバーに引けを取らない。そして体のタフネスも、チームメイトで日本代表のキャプテンを務めたリーチ・マイケル選手に「間違いなく日本で一番タフなスクラムハーフ」と言わしめるほどだ。それほどまでに心技体の能力が認められ、将来が期待されている髙橋さんは、プロとして順調に道を歩んでいるように見える。しかし本人は、「現状に満足することはない」と自分に厳しい。

「日々模索しながら、何が足りないのか、何をすべきなのか、ひとつずつ目標を掲げては、それを達成するようにしています。その原動力はどこにあるのかと問われれば、大好きなラグビーに正面から取り組めること自体でしょう。子供の頃からラグビーという、自分にとってブレない存在があって、そこで掲げた目標に向かって進めてこられているからこそ、自分をさらに成長させることにつながっていると思います。校友の方にも、ぜひ何か好きなことを持ち続けていただきたいですね」

ラグビーで道を切り拓いてきた髙橋さんは、チームにおける活躍はもちろん、より大きなステージへと飛躍していくことだろう。着実に大きくなっていくその姿から、目が離せない。

（2023年3月14日取材）